

「可視化シート」取り入れた歌唱授業の実践

—生徒自身が気付くプロセスのある音楽科学習を目指して—

篠原昂太（長崎市立小島中学校）

西田 治（長崎大学教育学部）

1. 研究の背景

筆者は、予てより生徒が自発的にかつ実感を持って学ぶことのできる授業がしたいと考えてきた。なぜなら、音楽の授業では、教師が一方的に技能や表現の方法を伝えていくようなレッスン形態の授業が多く、生徒は受け身になっている場合が多いと感じるからである。そういった教師主導型の授業は、演奏そのものは良くなるが、生徒自身は、演奏の変化や自身の上達を実感しにくく受け身のままである。

では、生徒自身が自発的に活動し、成長の実感を持って学ぶことができるようになるためには、何が必要なのであろうか。筆者は、「わかった」「できた」という気付きが原動力になると考えている。しかしながら、音楽の授業では、1時間毎の演奏の変化は繊細であり、変化を数量的に目で見ること難しく、「わかった」「できた」という気付きが実感しにくいという課題がある。そこから、生徒自身が演奏の変化に気付くことができるプロセスを意図的に導入することで、その課題を解消することができるのではないかと考えた。

今回は、歌唱の活動の音高を視点とした活動場面を例に、生徒一人ひとりが演奏の変化に気付くことができる手立てを考案し、検証授業を実施した。

2. 研究の目的と仮説

本研究の目的は、歌唱の活動において、可視化シートを取り入れることで、生徒自身が音程の繊細さに気付いたり、音の動きが分かるようになるかを明らかにすることである。可視化シートとは、音程をグラフ化して視覚的に音高を捉えさせるシートである。また、演奏の変化への気付きを促すために授業前後の演奏を比較聴取する場面を取り入れることとする。背景及び目的から本研究の仮説を「歌唱の活動において、可視化シートを取り入れることで、①音程に対する曖昧さに気付いたり、②正しい音の動きを生徒一人ひとりが理解することができたりするのではないだろうか」と設定した。

3. 先行研究

可視化についての研究は、楽譜そのものを可視化として捉えている場合が多く、楽譜を更に簡易化するという研究は多くなかった。その中で、田邊隆ら（2015）

は、オルゴールの楽譜を用い、「楽譜をグラフィックに捉えることは、音高と時間など楽曲の構造を概観する上で、有効である」(p. 52, 筆者要約)と述べている。また、「込み入った楽曲になると、詳細な情報は必要であるがかえって混乱の原因にもなるため、概観する発想は、初心者への配慮として求められる。」(p. 52)とも述べており、初心者に対する楽譜の導入に対して有効であることが示唆されている。

4. 検証授業

(1) 検証授業の概要

検証実践は、平成 28 年 5 月 25 日(水)に長崎市立 A 中学校で行った。学年は第三学年で、「Smile Again」を教材に用いた。題材は「音の重なりを感じよう」である。

本教材は、主教材「花」への導入で用いている。「花」より簡素な二重唱曲を導入で用いることにより、音の重なりをより感じさせることができると考えた。また、実践の中で自分たちの合唱を録音した演奏を聴く活動に取り組ませているが、生徒たちは自分たちの演奏を客観的に聴くことは初めてである。

本実践は題材 4 時間構成の第二時間目である。第一時間目は模範演奏の CD を聴いて、自分のパートの音を把握する活動に取り組んでいる。本時は、「なんとなく歌っている自分のパートの旋律を正しい音程で歌えるようになること」をねらいとした。

(2) 検証の方法

検証は、授業の終末で用いる振り返りシートを分析する。分析は、4 件法による調査を 2 項目と自由記述による以下の調査である。

- (1) 今まで音程に対して曖昧だったことに気付いた。(4 件法)
- (2) 見ながら聴くことで、正しい音の動きが分かるようになった。(4 件法)
- (3) 可視化シートはどんな風に役に立ちましたか？(自由記述)

(3) 検証授業の概要

授業は、初めに前時の振り返りとして合唱を行った。その際、録音を取り、自分たちの演奏を聴き、課題意識を持たせる活動を行った。次に、可視化シートを示し、本時のねらいは、正しい音程で歌うことであることを確認した。展開部分では、ねらいを達成するためのパート練習に取り組ませ、再度合唱し、録音を行った。最後に授業の最初と最後の録音を聴き比べ、振り返りを行い、授業を終了した。

[学習指導案の展開]

（４）可視化シートについて

可視化シート[図表１]は音の高低や長さを視覚的に捉えるためのものである。実践では、音の高低と動きを認識させ、パート練習の際に用いた。表は、縦軸が音高を、横軸が音価を示している。そのため、マス目は、縦軸が１つにつき半音を表しており、横軸が１６分音符を表している。旋律の開始音はイ音であり、調は二長調である。

[図表 1]

（５）課題を解決するためのパート練習について

めあてを「正しい音程で歌えるようになる」と設定した後、20 分程度パート練習に取り組ませた。生徒は、指で可視化シートを追いながら練習した。特に難しい箇所は練習する範囲を短くしたり、速度を遅く演奏したりするなど工夫した練習に取り組み、正しい音程で歌えるように練習した。教師は各パートを回り、特に音が取りにくい部分を指導した。

（６）演奏の変化に気付くための比較聴取について

「Smile Again」のサビの部分の授業の最初の録音と最後の録音を聴き比べさせた。生徒は聴き比べの際、真剣な表情で演奏を聴いていた。また、演奏の変化が

感じられる箇所では、「変わってる」と声に出して反応を示していた。今回の実践では、前回の実践（篠原ら（2016）を参照）の反省を生かし、比較聴取する時間を30秒以内に設定し、聴く視点が鮮明になるようにした。

5. 結果

検証授業を行った結果、2つの仮説において、次のような結果が得られた。まず、仮説①音程の繊細に気付くに関しては、授業後に行った振り返りシートを用い、「今まで音程に対して曖昧だったことに気付いた」という項目において、4件法の分析を行った。その結果、30名中29名の生徒が4（当てはまる）、3（少し当てはまる）に回答した。そのうち、4が16名（90%）、3が13名（10%）、2（あまり当てはまらない）が1名（%）だった〔図表3〕。

〔図表3〕

〔図表4〕

次に、仮説②音程の理解に関しては、授業後に行った振り返りシートの「見ながら聴くことで、正しい音の動きが分かるようになった」という項目において、4件法で調査を行った。その結果、30名中28名の生徒が4（当てはまる）、3（少し当てはまる）に回答した。そのうち、4が22名（77%）、3が6名（23%）、2（あまり当てはまらない）が2名だった〔図表4〕。

また、「可視化シートはどんな風に役にたちましたか」という記述の質問でも「今までは、あまり音程を気にしたことがなかったので、音の高い低いを気にしてシートを見ることで、音と音とのつながりを意識することができました。」「音程のとり方や、これは音程が外れているなどがとてもわかりやすかったです。」「自分が間違っているかもしれない場所がすぐに分かり、訂正できた所、どれくらい上がるのか、どれくらい下がるのかがとてもわかりやすかった。」と肯定的な意見がみられた。生徒の自由記述（抜粋）は〔図表5〕のとおりである。

〔図表 5〕

整理番号	<p style="text-align: center;">生徒による自由記述 (下線は筆者によるもの)</p>
1	<p>今までは、あまり音程を気にしたことがなかったので、<u>音の高い低いを気にしてシートを見ることで、音と音とのつながりを意識することができました。</u>見る前より歌いやすくなりました。1回目より2回目の方がみんなの声がまとまっている気がしました。私も歌っていてとても歌いやすかったです。</p>
2	<p><u>音程の取り方や、これは音程が外れているななどがとても分かりやすかったです。</u>可視化シートによって正しい音がとれていたのもとても役に立ったと思いました。自分達が歌った1回目と2回目を聴いて変わった所は音程がちゃんとしている所だと思います。なので良くできているなと思いました。</p>
3	<p><u>自分が間違っているかもしれない場所がすぐに分かり、訂正できた所です。</u>どれくらい上がるのかどれくらい下がるのかがとてもわかりやすかった。目で見ることにより音程がとりやすくなった。1回目に聴いたときと2回目に聴いたときでは、サビの音程が違って、2回目の方が綺麗だと思った。</p>
4	<p>初めはどんな感じの音程か分からなかったけど、音程シートを見て、音の取り方がわかったので、少しの音が違わずれてしまうので、音程シートがあっていいと思いました。<u>1回目は少しずっていたけど、2回目は音程が合っていたので変わったと思いました。</u>何もないで歌うよりは音程シートを見て歌うと変わると思いました。</p>
5	<p><u>音の上がり下がりや音の長さがきちんとわかるようになりました。</u>今回の授業で「こうだ」で歌えるようになれたと思います。1回目より2回目の方が音程が合っているなと思いました。</p>
6	<p><u>楽譜だけだとどこがどんな音だとは気づかず曖昧になる部分とかがあったけど音程シートを見て歌うと曖昧なサビの部分の正しい音で歌うことができました。</u>とてもわかりやすかったです。1回目と2回目の歌を聴くと1回目は少し曖昧で歌っていたけど2回目はシートを見たのでとてもきれいで正しい音でした。</p>
7	<p><u>音程シートがあることで、わかりやすくて音程がとりやすいと思った。</u>そして<u>音程が間違っていたら気づきやすい。</u>音程シートがなくても歌えるようにしていきたい。自分たちの歌は上手だと思った。だけど私自身はだめだめだと思うので上手になりたい。</p>
8	<p>歌の音程は歌詞の音符でしか見たことがなかったから<u>音程シートは音符よりもみやすく、音程がわかりやすくなっていた</u>からすごくよかったです。自分たちで歌っているときにきく音と全然違ったから少し変な感じでした。</p>

9	<u>次の音と高さの違いが今までは分からなかったけど可視化シートを使ったことでわかったから今までよりも数段歌いやすくなった。</u> 自分たちでうたった「Smile Again」は一回目は全体的に声が小さかったけど2回目は全体的に声が大きくなった。
10	<u>可視化シートを見ていないより見ていた方が音程がとれていたのがよくわかった。</u> 録音を聴いて思ったことは、あまり歌っていない曲だけどみんな音程がとれていたのですごいなと思った。次は低い音の方を歌えるようになりたい。
11	最初は何も言われずに見てるとわけがわからなかったけど、この <u>音程シートの良さを</u> 知ること、この「Smile Again」という曲が音程を意識して歌えるようになった。1回目と2回目を比べて聴くとこの音程シートで音程がわかりやすくなって、一人一人の声が大きくなっている。
12	前の音とこの音がどれだけ離れているのかが分かりやすかったです。 <u>音がブロック状になっていて見やすかった</u> ので音程が今までよりとれやすくなったと思います。1回目より2回目の方が少し皆の声がそろって聞こえました。私も2回目の時、音程を気にして歌えました。
13	今までは、半音上がったり、下がったりするところが少し曖昧でしたが、 <u>このシートを使って、曖昧だったことに気づけました。</u> 音程通り歌えるようになりました。1回目は音程があっているか不安だったので、自信を持って大きく歌えませんでした、2回目はそれがなくなり大きな声で歌えました。
14	<u>音程がわからないときに音程シートを見たらどこでどれくらい音が上がっているか下がっているかがわかった。</u> 声量が大きくなっていて聞きやすかった。あと、音程が合っていて綺麗な歌声だった。
15	音の動きが分かりやすく書いてあって歌いやすい。 <u>楽譜を見ると分からないところが音程シートを見るとすぐ分かって便利。</u> 1回目は声が小さくてみんなの声が聞こえない感じがしたけど、2回目はみんなの声も大きくてキレイだった。
16	<u>自分の音程と比べてみてすこし違う部分があってそこをしっかりと直すことができたのでよかったと思います。</u> 曖昧だったところを直してよかったと思います。「Smile Again」をみんなで歌って1回目と2回目では違っていて合唱コンクールでこれを役立てたらいいと改めて思いました。

6. 考察

結果を検証する授業実践を行った結果、本実践授業においては、冒頭で提示した二つ仮説に対して以下の考察が得られた。

仮説①については、可視化シートは音程の繊細さに気付かせるうえで有効であ

ったこと、仮説②については、可視化シートは音の動きを分かるうえで有効だったことである。

また、[図表 5]の下線部分が示すように、可視化シートによって、音程を視覚的にとらえ、演奏前後の比較聴取を行うことで生徒一人一人が演奏の変化に自ら気づくことができていた。また、視覚的にとらえて自らの力で確認しながら活動を行えたこと、それによって演奏が良い方向に変化したことを実感し成就感を得ている様子がうかがえた。これは冒頭で筆者が提示した授業の方向性を指すうえで可視化シートが有効に機能したことを示すものであったといえる。

7. まとめと今後の展望

本実践研究では、可視化シートを取り入れた授業によって、生徒自身が音程の繊細さや音程の動きに気付くことができるかを明らかにした。検証授業の結果、可視化シートは音程の繊細に気付くうえでも、音の動きが分かるうえでも有効だったことが分かった。

今回の研究では授業実践が一度のみで、仮説を十分に検証するためのデータが不足していた。そのため、来年度は、より多くの学級で実践を行い、引き続き検証を続けていきたい。

参考・引用文献一覧

- 田邊隆, 福富彩子 (2015) 「音楽表現の可視化に関する研究」, pp. 51-55. 『愛媛大学教育学部紀要 第 62 巻』
- 篠原昂太 三上次郎 田中秀明 西田治 (2016) 『比較聴取を取り入れた歌唱授業の実践』, pp. 429～436. 『長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要 第 15 号』